

授業のタイトル (科目名)	単位数	免許・資格 必修/選択	授業担当																																
アジア文化史	2	キリスト教文化コース(必) 神学基礎コース(選)	石黒則年																																
<p><b>[授業の目的・ねらい]</b></p> <p>近年、アジア諸国に対する関心が高まってきた。貿易輸出額では中国がアメリカや日本を抜いて第1位、輸入額ではアメリカについて第2位となった。韓国の映画やテレビドラマは「韓流ブーム」を引き起こし、多くの日本人の関心を呼んでいる。と同時に、日本国内にはアジア諸国から非難されるような国粹主義者たちの発言も声高になって来ている。これらの諸々の事実の背後にひそむ問題を明らかにする。韓国からトルコまでのアジア全域の国々の様子を概観する。</p> <p><b>[授業全体の内容と概要]</b></p> <p>授業は、プリントを用いての講義が主体で、総論的になされる。アジア全体の問題が把握できるように具体性に留意した授業となるように心がける。時にはビデオ資料も活用する。</p> <p><b>[授業修了時の達成 (到達目標)]</b></p> <p>アジア諸国に関連した問題に関心を持つようになり、今後の日本がどのように対処すべきかを考えながら、「アジア研究演習」の履修に向けて、基礎的な知識が得られるようにする。</p>																																			
<p><b>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</b></p> <table border="1"> <tr><td>1</td><td>「国際」の概念と「アジア」の領域にある国々について、「課題」の配布</td></tr> <tr><td>2</td><td>第2次世界大戦とその影響について</td></tr> <tr><td>3</td><td>冷戦時代の構造と、その後の動向について</td></tr> <tr><td>4</td><td>朝鮮半島のもつ文化と課題について</td></tr> <tr><td>5</td><td>中国文明と日本文化の関わりの概観</td></tr> <tr><td>6</td><td>現代の中国の躍進と、日本と関わる問題点</td></tr> <tr><td>7</td><td>A S E A N諸国：その1 (シンガポール、フィリピン、タイなど)</td></tr> <tr><td>8</td><td>A S E A N諸国：その2 (インドネシア、マレーシアなど)</td></tr> <tr><td>9</td><td>A S E A N諸国：その3 (インドシナ半島の国々など)</td></tr> <tr><td>10</td><td>インドとその周辺諸国 (パキスタンとバングラデッシュ)</td></tr> <tr><td>11</td><td>イスラム諸国の動向：その1 (主としてイラン、イラク、シリアなど)</td></tr> <tr><td>12</td><td>イスラム諸国の動向：その2 (ヨルダン、サウジアラビアなど)</td></tr> <tr><td>13</td><td>イスラエルと中東問題について</td></tr> <tr><td>14</td><td>トルコなどの動向</td></tr> <tr><td>15</td><td>まとめ：アジアの課題</td></tr> <tr><td></td><td>期末レポートの提出</td></tr> </table>				1	「国際」の概念と「アジア」の領域にある国々について、「課題」の配布	2	第2次世界大戦とその影響について	3	冷戦時代の構造と、その後の動向について	4	朝鮮半島のもつ文化と課題について	5	中国文明と日本文化の関わりの概観	6	現代の中国の躍進と、日本と関わる問題点	7	A S E A N諸国：その1 (シンガポール、フィリピン、タイなど)	8	A S E A N諸国：その2 (インドネシア、マレーシアなど)	9	A S E A N諸国：その3 (インドシナ半島の国々など)	10	インドとその周辺諸国 (パキスタンとバングラデッシュ)	11	イスラム諸国の動向：その1 (主としてイラン、イラク、シリアなど)	12	イスラム諸国の動向：その2 (ヨルダン、サウジアラビアなど)	13	イスラエルと中東問題について	14	トルコなどの動向	15	まとめ：アジアの課題		期末レポートの提出
1	「国際」の概念と「アジア」の領域にある国々について、「課題」の配布																																		
2	第2次世界大戦とその影響について																																		
3	冷戦時代の構造と、その後の動向について																																		
4	朝鮮半島のもつ文化と課題について																																		
5	中国文明と日本文化の関わりの概観																																		
6	現代の中国の躍進と、日本と関わる問題点																																		
7	A S E A N諸国：その1 (シンガポール、フィリピン、タイなど)																																		
8	A S E A N諸国：その2 (インドネシア、マレーシアなど)																																		
9	A S E A N諸国：その3 (インドシナ半島の国々など)																																		
10	インドとその周辺諸国 (パキスタンとバングラデッシュ)																																		
11	イスラム諸国の動向：その1 (主としてイラン、イラク、シリアなど)																																		
12	イスラム諸国の動向：その2 (ヨルダン、サウジアラビアなど)																																		
13	イスラエルと中東問題について																																		
14	トルコなどの動向																																		
15	まとめ：アジアの課題																																		
	期末レポートの提出																																		
<p><b>[使用テキスト・参考文献]</b></p> <p>テキストは指定しないが、『朝日キーワード2010』朝日新聞社、2010、『時事ニュースワード2010』時事通信社を参考書として推薦する。</p>		<p><b>[単位認定の方法及び基準]</b></p> <p>期末の試験代用レポートを80%、授業中の質問や討論への積極的な参加を20%として合算して評価する。</p>																																	

授業のタイトル (科目名)	単位数	免許・資格 必修/選択	授業担当																																
旧約聖書釈義Ⅰ (申命記)	2		石黒則年																																
<p><b>[授業の目的・ねらい]</b>            聖書釈義の神学全体における位置付けを認識し、その方法論の歴史の変遷を探究することから始め、旧約聖書の正典性・無誤性を支持する立場から、「トーラー」(律法)の本文テキストを釈義する。            したがって、ヘブル語についての初歩的な知識があることを受講の前提とする。</p> <p><b>[授業全体の内容と概要]</b>            申命記から選択されたテキストの定義的、文法的、歴史的探求を基本とするが、緒論研究においては高等批評学の見解とその学的推移についても言及する。本文釈義から神学的考察、さらには講解説教への展開についても示唆する。</p> <p><b>[授業修了時の達成 (到達目標)]</b>            聖書本文テキストの文法的分析、シンタクス上の留意点にも注意し、ヘブル語聖書の文体と神学とを修得することを目標とする。</p>																																			
<p><b>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</b></p> <table border="1"> <tr><td>1</td><td>神学全体における旧約聖書釈義の位置付け</td></tr> <tr><td>2</td><td>申命記と列王記、歴代誌との関わり</td></tr> <tr><td>3</td><td>トーラー (律法) 研究の歴史的概観</td></tr> <tr><td>4</td><td>申命記テキストの釈義 (第6章)</td></tr> <tr><td>5</td><td>同上の続き</td></tr> <tr><td>6</td><td>申命記テキストの釈義 (第5章)</td></tr> <tr><td>7</td><td>同上の続き</td></tr> <tr><td>8</td><td>申命記第5章と出エジプト記第20章との比較研究</td></tr> <tr><td>9</td><td>申命記テキストの釈義 (第18章および第13章)</td></tr> <tr><td>10</td><td>申命記テキストの釈義 (第34章)</td></tr> <tr><td>11</td><td>同上の続き</td></tr> <tr><td>12</td><td>申命記テキストの釈義 (第28章)</td></tr> <tr><td>13</td><td>同上の続き</td></tr> <tr><td>14</td><td>申命記テキストの釈義 (第23章)</td></tr> <tr><td>15</td><td>申命記釈義全般に関する質疑応答</td></tr> <tr><td></td><td>試験代用レポートの提出</td></tr> </table>				1	神学全体における旧約聖書釈義の位置付け	2	申命記と列王記、歴代誌との関わり	3	トーラー (律法) 研究の歴史的概観	4	申命記テキストの釈義 (第6章)	5	同上の続き	6	申命記テキストの釈義 (第5章)	7	同上の続き	8	申命記第5章と出エジプト記第20章との比較研究	9	申命記テキストの釈義 (第18章および第13章)	10	申命記テキストの釈義 (第34章)	11	同上の続き	12	申命記テキストの釈義 (第28章)	13	同上の続き	14	申命記テキストの釈義 (第23章)	15	申命記釈義全般に関する質疑応答		試験代用レポートの提出
1	神学全体における旧約聖書釈義の位置付け																																		
2	申命記と列王記、歴代誌との関わり																																		
3	トーラー (律法) 研究の歴史的概観																																		
4	申命記テキストの釈義 (第6章)																																		
5	同上の続き																																		
6	申命記テキストの釈義 (第5章)																																		
7	同上の続き																																		
8	申命記第5章と出エジプト記第20章との比較研究																																		
9	申命記テキストの釈義 (第18章および第13章)																																		
10	申命記テキストの釈義 (第34章)																																		
11	同上の続き																																		
12	申命記テキストの釈義 (第28章)																																		
13	同上の続き																																		
14	申命記テキストの釈義 (第23章)																																		
15	申命記釈義全般に関する質疑応答																																		
	試験代用レポートの提出																																		
<p><b>[使用テキスト・参考文献]</b>            P. D. ミラー『申命記』石黒則年訳、日本基督教団出版局、フランススコ会聖書研究所(編)『申命記』中央出版社などを批判的に使用する。参考文献を別途、配布する。</p>		<p><b>[単位認定の方法及び基準]</b>            学期末の試験代用レポート70%に、質問や討論への積極的な参加を30%として合算して評価する。</p>																																	

授業のタイトル (科目名)	単位数	免許・資格 必修/選択	授業担当
旧約聖書釈義Ⅱ (エレミヤ書)	2	必修	重富 勝己
<p><b>[授業の目的・ねらい]</b></p> <p>本科目では預言書のうち「エレミヤ書」を採りあげる。BHS原点に直接あたりつつ、本文批評の意義（特にマソラ及び脚注批評を扱う姿勢も含め）に始まり、テキストの文法的、歴史的な意味を釈義的に確定する。さらに様式・伝承批評および文芸構造の分析等の方法論も適宜紹介しつつ、説教・伝道の牧会・教会形成に資することのできる聖書の学びを自ら獲得することを目指す。</p>			
<p><b>[授業全体の内容と概要]</b></p> <p>捕囚期に位置するエレミヤ書の歴史的背景、人物像、活動の内容を同時代の他の旧約聖書文書との関連性の中で位置付け、そのメッセージを明らかにする。</p> <p>エレミヤの活動を大きく三期に分類し、あらかじめ指定したテキストの箇所（10節程度）を受講者が分担して釈義し、レジュメに基づいて発表した後、教師が補足する。説教にどのように展開できるのかも議論したい。</p>			
<p><b>[授業修了時の達成（到達目標）]</b></p> <p>旧約聖書の原点テキストを深いレベルで釈義する方法論と能力を身につけ、現代的に説教へと展開してゆく。</p>			
<p><b>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</b></p>			
1	オリエンテーション - エレミヤ書の解釈史、文献紹介		
2	エレミヤ書1章1～3節 - エレミヤ書の歴史的背景。イスラエル捕囚期の社会史		
3	エレミヤ書1章4～10節 - エレミヤの召命。エレミヤの人物像		
4	エレミヤ書2章1～9節 - エレミヤのメッセージ。民の罪を弾劾		
5	エレミヤ書3章1～13節 - エレミヤのメッセージ。悔い改めへの呼びかけ		
6	エレミヤ書7章1～15節 - エレミヤの神殿での預言。26章との関連性は？		
7	エレミヤ書11章18～12章6節 - エレミヤの告白録（1） 主の義とは？		
8	エレミヤ書15章10～21節 - エレミヤの告白録（2） 苦難の意味は？		
9	エレミヤ書20章7～18節 - エレミヤの告白録（3） 本当に召されたのか？		
10	エレミヤ書16章1～13節 - エレミヤの孤独		
11	エレミヤ書13章1～17節 - エレミヤの象徴預言の意味		
12	エレミヤ書28章1～17節 - 偽預言者との対決の意味		
13	エレミヤ書29章1～23節 - エレミヤの手紙に込められた意味		
14	エレミヤ書31章1～6、31～34節 - 新しい契約と回復の預言		
15	エレミヤの生涯の特徴と新約聖書への影響と意義。		
<p><b>[使用テキスト・参考文献]</b></p> <p>Biblia Hebraica Stuttgartensia, 『聖書』</p>		<p><b>[単位認定の方法及び基準]</b></p> <p>授業出席および分担箇所の釈義の発表、指定箇所の説教（15分程度）の発表。学期末に発表箇所のレポート提出を総合評価する。</p>	

授業のタイトル (科目名)	単位数	免許・資格 必修/選択	授業担当
旧約聖書積義Ⅲ (詩篇)	2		石黒則年
<p><b>[授業の目的・ねらい]</b></p> <p>旧約聖書積義として「諸書」(ケトゥブーム)の代表的なものの一つである「詩篇」を取り扱う。詩篇積義の歴史を概観することから始め、聖書の正典性・無誤性を支持する立場から積義する。文法的・歴史的な探求を基本とするが、高等批評学的な研究についても言及する。</p> <p><b>[授業全体の内容と概要]</b></p> <p>時間が限られているので、「詩篇」を選択的に取り扱う。ヘブル語本文テキストの文法的分析、シンタクス上の留意点や、新約聖書との関連性なども指摘する。</p> <p><b>[授業修了時の達成 (到達目標)]</b></p> <p>旧約聖書の「詩篇」の文体と内容とに習熟することを目標とする。</p>			
<p><b>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</b></p>			
1	序論：その1 (詩篇研究の歴史について)		
2	序論：その2 (詩篇の文体的特徴について)		
3	詩篇第2篇 (王の詩篇) の積義		
4	同上の続き		
5	詩篇第1篇 (知恵の詩篇) の積義		
6	同上の続き		
7	詩篇第22篇 (個人の嘆きの詩と賛美) の積義		
8	同上の続き		
9	詩篇第23篇 (確信の詩) の積義		
10	同上の続き		
11	詩篇第73篇 (知恵の詩篇=教訓詩) の積義		
12	詩篇第51篇 (個人の嘆きの詩、悔い改めの詩) の積義。I列王記2章1~10節との関連性		
13	詩篇第119篇 (知恵の詩篇、いろは歌)		
14	詩篇第121篇 (都上りの詩、第120篇および第122篇との関わり)		
15	詩篇全体の編集について		
	試験代用レポートの提出		
<p><b>[使用テキスト・参考文献]</b></p> <p>石黒則年『詩篇 (72~150篇)』いのちのことば社、1988年、フランススコ会聖書研究会 (編) 『詩編』中央出版社などを批判的に使用する。</p>		<p><b>[単位認定の方法及び基準]</b></p> <p>学期末に提出する詩編積義レポートを80%、質問や討論への積極的な参加を20%として合算評価する。</p>	

授業のタイトル (科目名)	単位数	免許・資格 必修/選択	授業担当
新約聖書釈義 I	2		津村春英
<p><b>[授業の目的・ねらい]</b>            新約聖書釈義 I では、福音書を釈義的に考察する。その歴史的文化的背景、本文批評からテキストの決定、私訳、構造分析、文法、語彙研究などを通して、その神学的主張、メッセージを聞きとる。</p> <p><b>[授業全体の内容と概要]</b>            今回は「ルカによる福音書」を取り上げる。受講者は以下の予定表に基づき、文法的解釈、直訳の予習が課せられる。</p> <p><b>[授業修了時の達成 (到達目標)]</b>            新約聖書を釈義する力を身につけ、その適用としての説教に展開する能力を養う。</p>			
<b>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</b>			
1	ルカ福音書概観		
2	Mark A. Powell, "What are they saying about Luke?" より		
3	同2		
4	ルカ福音書のコヒアレンス考		
5	同2		
6	ルカ福音書1:1-4		
7	ルカ福音書1:26-38		
8	ルカ福音書1:39-56		
9	ルカ福音書1:69-79		
10	ルカ福音書2:22-40		
11	ルカ福音書8:40-56		
12	ルカ福音書9:10-17		
13	ルカ福音書10:1-12		
14	ルカ福音書10:25-37、予備11:1-13		
15	まとめ、釈義レポート提出		
<b>[使用テキスト・参考文献]</b>		<b>[単位認定の方法及び基準]</b>	
Nestle=Aland 27 Auflage、橋本滋男、津村春英『ネストレ=アールント・ギリシア語新約聖書序文』（日本聖書協会）他		出席状況、授業貢献、釈義レポート	

授業のタイトル (科目名) 新約聖書釈義Ⅱ	単位数 2	免許・資格 必修/選択	授業担当 津村春英
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>新約聖書釈義Ⅱでは、パウロ書簡を釈義的に考察する。その歴史的文化的背景、本文批評からテキストの決定、私訳、構造分析、文法、語彙研究などを通して、その神学的主張、メッセージを開きとる。</p> <p>[授業全体の内容と概要]</p> <p>今回は「コリント人への手紙-」を取り上げる。受講者は以下の予定表に基づき、文法的解釈、直訳の予習が課せられる。</p> <p>[授業修了時の達成 (到達目標)]</p> <p>新約聖書を釈義する力を身につけ、その適用としての説教に展開する能力を養う。</p>			
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]			
1	コリント書簡概観		
2	「コリント人への手紙-」概論、その1		
3	その2		
4	Witherington III Ben, Conflict and Community in Corinth より		
5	同2		
6	コリント-1:18-31		
7	コリント-3:1-9		
8	コリント-5:1-13		
9	コリント-7:17-24		
10	コリント-8:1-13		
11	コリント-10:23-31		
12	コリント-12:12-26		
13	コリント-13:1-13		
14	コリント-15:12-19		
15	まとめ、釈義レポート提出		
[使用テキスト・参考文献]		[単位認定の方法及び基準]	
Nestle=Aland 27 Auflage、橋本滋男、津村春英『ネストレ=アーラント・ギリシア語新約聖書序文』（日本聖書協会）他		出席状況、授業貢献、釈義レポート	

授業のタイトル (科目名)	単位数	免許・資格 必修/選択	授業担当
旧約聖書神学	2		石黒則年
<p><b>[授業の目的・ねらい]</b></p> <p>旧約聖書神学の神学全体の位置付け、方法論の歴史の変遷についての探求から始め、代表的な神学者の主張を概観する。</p> <p>後半においては、旧約聖書の間人論を核として考察を展開し、キリスト教界への学的貢献の道を探る。</p> <p><b>[授業全体の内容と概要]</b></p> <p>アイスフェルト、アイヒロット、フリーゼン、フォン・ラート、カイザー、チャイルズらの主張を概観し、旧約聖書神学の動向を考察する。後半には受講者の発表の機会も与えられる。</p> <p><b>[授業修了時の達成 (到達目標)]</b></p> <p>旧約聖書神学の流れを把握し、かつヘブル的思想の独自性を理解することを目標とする。</p>			
<b>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</b>			
1	神学全般における旧約聖書神学の位置付け		
2	旧約聖書神学の歴史の変遷：その1		
3	旧約聖書神学の歴史の変遷：その2		
4	旧約聖書神学の方法論をめぐって		
5	同上の続き		
6	聖書の間人論：その1		
7	聖書の間人論：その2		
8	旧約聖書の間人論：その1 (「神のかたち」をめぐって)		
9	旧約聖書の間人論：その2 (「罪」の本質をめぐって)		
10	旧約聖書の間人論：その3		
11	旧約聖書の間人論：その4		
12	旧約聖書の間人論：その5		
13	旧約聖書の間人論：その6		
14	旧約聖書の間人論：その7		
15	まとめ		
	試験代用レポートの提出		
<b>[使用テキスト・参考文献]</b>		<b>[単位認定の方法及び基準]</b>	
<p>『聖書神学事典』いのちのことば社、東京神学大学神学会(編)  『旧約聖書神学事典』(教文館)、G.E.Hasel, Old Testament Theology, Wm. B. Eerdmans、ヴォルフ『旧約聖書の間人論』(日本基督教団出版局)などを出発点とする。</p>		<p>期末の試験代用レポートを80%、質問や討議への積極的な参加を20%として合算評価する。</p>	

授業のタイトル (科目名) 新約聖書神学	単位数 2	免許・資格 必修/選択	授業担当 塚本 恵
<p><b>[授業の目的・ねらい]</b>          神の言葉である新約聖書について、釈義的・神学的に研究する。そしてそこからイエス・キリストを告知する学としての新約聖書神学の全体像を探ってみる。学問的および批判的な研究をふまえながらも、変わりつつある現代の教会での奉仕とどう関連させるのかという点を考慮し討論する。</p> <p><b>[授業全体の内容と概要]</b>          ゼミ形式として、まず各自が、指定された箇所に基づいて発表をする。そしてそれについて、自由に質疑・討論をする。さらに補足的に講義を行う。新約聖書全体にわたって、幅広く学習ができるようにする。</p> <p><b>[授業修了時の達成 (到達目標)]</b>          解釈学的循環を前提とするが、一つの方法にこだわらない、自由な姿勢を保持することで、各自の新約聖書神学の構築を計りたい。</p>			
<b>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</b>			
1	序論 新約聖書神学とは何か		
2	新約聖書神学の課題と方法論		
3	共観福音書と史的イエス/洗礼者ヨハネ		
4	主イエスのメシア意識・主イエスの倫理的要求		
5	主イエスの裁判と十字架・主イエスの復活		
6	原始教団の宣教と異邦人伝道		
7	パウロの召命と伝道旅行 *課題についての発表		
8	使徒パウロの神学と倫理/牧会書簡		
9	ヨハネの歴史的な位置づけ		
10	ヨハネの教会論・終末論		
11	ヨハネの黙示録		
12	ヤコブの手紙/Iペトロの神学		
13	ヘブライ書の神学		
14	新約聖書の中心		
15	まとめ 新約聖書神学の課題、主イエス、使徒パウロ、ヨハネ、新約聖書の中心		
	期末試験		
<b>[使用テキスト・参考文献]</b> W.G.キュンメル『新約聖書神学』(1981年)、E.シュヴァイツァー『新約聖書への神学的入門』(1999年)、F.ハーン『新約聖書神学』(2006年)。		<b>[単位認定の方法及び基準]</b> 期末試験 (60%)、クラスでの発表 (20%)、出席など平常 (20%) とする。	

授業のタイトル (科目名)	単位数	免許・資格	必修/選択	授業担当
O.T.ヘブル語初歩	2			石黒則年
<p><b>[授業の目的・ねらい]</b>            旧約聖書の原典原語である聖書ヘブル語について、文字の書き方から始め、基本単語の修得、初歩文法の学修をなす。加えて、旧約原典そのものの文体に触れさせ、旧約聖書釈義、旧約聖書神学への備えをなす。</p>				
<p><b>[授業全体の内容と概要]</b>            ヘブル語の初歩文法の講義による授業が第一であるが、比較的早い時期から旧約聖書の本文テキストに触れさせ、実際のテキスト理解に当たらせる。時間が許せば、アラム語や現代ヘブル語の特徴なども紹介する。</p>				
<p><b>[授業修了時の達成 (到達目標)]</b>            旧約聖書釈義や旧約聖書神学の学びに備えて、ヘブル語テキストの分析能力を身に付けることを目標とする。</p>				
<b>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</b>				
1	翻訳聖書の限界と、原典聖書の面白さ	16	前期の復習	
2	ヘブル語子音文字の学修	17	ピエル形・完了態と未完了態	
3	ヘブル語母音符号の学修	18	ブアル形・完了態と未完了態	
4	強ダゲシュと弱ダゲシュ	19	ヒフイール形・完了態と未完了態	
5	ヘブル語の名詞の変化	20	ホフアル形・完了態と未完了態	
6	ヘブル語の形容詞の変化と特徴	21	ヒトバエル形・完了態と未完了態	
7	前置詞とその主な用法	22	動詞のまとめ	
8	ヘブル語の文章構造と記述の仕方	23	喉音動詞の変化表	
9	動詞カル形・完了態の変化	24	同上	
10	動詞カル形・未完了態の変化	25	弱動詞の変化表	
11	動詞カル形・命令、不定詞、分詞	26	同上	
12	動詞カル形の全体的な復習	27	旧約原典ヘブル語テキストの分析	
13	動詞ニファル形・完了態の変化	28	同上	
14	動詞ニファル形・未完了態の変化	29	同上	
15	動詞の変化表全体の紹介と説明	30	同上、アラム語、現代ヘブル語の紹介	
	前期末筆記テスト		学年末筆記テスト	
<p><b>[使用テキスト・参考文献]</b>            BHS、左近義慈ほか『ヒブル語入門』(教文館)、BDB、Hebrew and Aramaic Lexicon of the O.T.を参考書として推薦する。テキストは使用しないで、適宜、プリントを配布する。</p>		<p><b>[単位認定の方法及び基準]</b>            前期末テスト、学年末テストの平均を70%とし、ほとんど毎回のショートテストの結果を30%として加味して総合評価をする。</p>		

授業のタイトル (科目名)	単位数	免許・資格 必修/選択	授業担当
N.T.ギリシア語講読	2		津村春英
[授業の目的・ねらい]			
新約聖書ギリシア語初歩履修後のギリシア語中級である。新約聖書のギリシア語本文を文法的に分析しながら講読し、更なるギリシア語力の向上を目指す。			
[授業全体の内容と概要]			
初期教会史を概観し、ヨハネ文書そして、ヨハネ書簡を概観する。その後、ヨハネの手紙一、二、三と順次講読すると共に、最近の聖書学の動向についても学ぶ機会を持つ。受講者は予習が必須である。			
[授業修了時の達成 (到達目標)]			
辞書を頼りに新約聖書ギリシア語本文が自由に読めるようになることを期待する。			
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]			
1	初級文法の復習 1	16	前半の復習
2	初級文法の復習 2	17	ヨハネの手紙一 3:11-23
3	初級文法の復習 3	18	ヨハネの手紙一 4:1-10
4	初級文法の復習 4	19	ヨハネの手紙一 4:11-21
5	小まとめとテスト 1	20	ヨハネの手紙一 5:1-12
6	初期教会史概観	21	ヨハネの手紙一 5:13-21
7	ヨハネ文書概観	22	ヨハネの手紙一の総括
8	ヨハネ書簡概観上	23	小まとめとテスト 3
9	ヨハネ書簡概観下	24	ヨハネの手紙二 1:1-13
10	ヨハネの手紙一 1:1-10	25	ヨハネの手紙二の総括
11	ヨハネの手紙一 2:1-11	26	ヨハネの手紙三 1:1-14
12	ヨハネの手紙一 2:12-21	27	ヨハネの手紙三の総括
13	ヨハネの手紙一 2:22-29	28	ギリシア語構文の分析 1
14	ヨハネの手紙一 3:1-10	29	ギリシア語構文の分析 2
15	小まとめとテスト 2	30	総復習と最終確認テスト
[使用テキスト・参考文献]		[単位認定の方法及び基準]	
NA27 Auflage、聖書、津村春英「『ヨハネの手紙一』の研究」		毎授業時の発表と筆記テスト	

授業のタイトル (科目名)	単位数	免許・資格 必修/選択	授業担当																														
組織神学Ⅰ	2		塚本 恵																														
<p><b>[授業の目的・ねらい]</b></p> <p>神学とは基本的には、キリスト者が礼拝し、栄光を帰する神についての省察と考えられる。そこで、この神に関する学問の領域について、キリスト教信仰の基本的な教理や概念を理解しつつ、組織的・歴史的に考察することを目的としたい。</p> <p><b>[授業全体の内容と概要]</b></p> <p>神学の方法、聖書論、神論、創造論、キリスト論、聖霊論、教会論、終末論などの各項目について言及する。そしてそれらについて、また現代の宣教との関連について、自由に討論できるようにしたい。講義を中心とするが、クラスでの質疑応答や討論が自由にできるようにしたい。また、一つの立場にこだわらず、広く問題意識を持つことが望ましい。</p> <p><b>[授業修了時の達成 (到達目標)]</b></p> <p>神学について、広く学んで、問題意識を鋭くして、自らの力で考えまた討論できるようにする。</p> <p><b>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</b></p> <table border="1"> <tr><td>1</td><td>序論 神学することについて</td></tr> <tr><td>2</td><td>神学の課題と方法</td></tr> <tr><td>3</td><td>神学の歴史 現代の神学者たち</td></tr> <tr><td>4</td><td>聖書論・正典論</td></tr> <tr><td>5</td><td>神論・創造論</td></tr> <tr><td>6</td><td>神論・三位一体論</td></tr> <tr><td>7</td><td>キリスト論 信仰と歴史 *課題 (小論文) の提出</td></tr> <tr><td>8</td><td>キリスト論・贖罪論</td></tr> <tr><td>9</td><td>聖化論</td></tr> <tr><td>10</td><td>聖霊論</td></tr> <tr><td>11</td><td>人間の本性、義認論</td></tr> <tr><td>12</td><td>礼典論 *ブック・レビューの提出</td></tr> <tr><td>13</td><td>教会論</td></tr> <tr><td>14</td><td>終末論</td></tr> <tr><td>15</td><td>まとめ 神学を学ぶとは 神論・キリスト論・三位一体論・終末論 *レポート提出</td></tr> </table> <p><b>[使用テキスト・参考文献]</b> A.E.マクグラス『キリスト教神学入門』(教文館、2002年)。</p> <p><b>[単位認定の方法及び基準]</b> 課題に関する試験代用レポート (60%)、ブック・レビュー (20%)、および出席・質疑応答など (20%) とする。</p>				1	序論 神学することについて	2	神学の課題と方法	3	神学の歴史 現代の神学者たち	4	聖書論・正典論	5	神論・創造論	6	神論・三位一体論	7	キリスト論 信仰と歴史 *課題 (小論文) の提出	8	キリスト論・贖罪論	9	聖化論	10	聖霊論	11	人間の本性、義認論	12	礼典論 *ブック・レビューの提出	13	教会論	14	終末論	15	まとめ 神学を学ぶとは 神論・キリスト論・三位一体論・終末論 *レポート提出
1	序論 神学することについて																																
2	神学の課題と方法																																
3	神学の歴史 現代の神学者たち																																
4	聖書論・正典論																																
5	神論・創造論																																
6	神論・三位一体論																																
7	キリスト論 信仰と歴史 *課題 (小論文) の提出																																
8	キリスト論・贖罪論																																
9	聖化論																																
10	聖霊論																																
11	人間の本性、義認論																																
12	礼典論 *ブック・レビューの提出																																
13	教会論																																
14	終末論																																
15	まとめ 神学を学ぶとは 神論・キリスト論・三位一体論・終末論 *レポート提出																																

授業のタイトル (科目名)	単位数	免許・資格 必修/選択	授業担当																														
組織神学Ⅱ	2		塚本 恵																														
<p><b>[授業の目的・ねらい]</b></p> <p>キリスト論とは、旧約聖書および新約聖書に啓示されている、メシア（キリスト）について、キリストに対する信仰の確信を持ちつつ、歴史的・神学的・そして釈義的に論じることであると考えられる。キリストが受肉されキリスト教会が建てられて以降、様々な神学者・思想家が、キリスト論に関する論考を残している。そうした思想の直接資料に触れながら、キリスト論の基礎部分の全体像を把握したい。</p> <p><b>[授業全体の内容と概要]</b></p> <p>古代から現代に至るキリスト教史の中での、キリスト論の議論についての講義を中心とするが、クラスでの質疑応答や討論が自由にできるようにしたい。また、一つの立場にこだわらず、広く問題意識を持つことが望ましい。そして、様々な神学の方法論を学んで、それらの現代の宣教への適用を考える。</p> <p><b>[授業修了時の達成（到達目標）]</b></p> <p>聖書神学・歴史神学・組織神学・実践神学からなる、神学全体のまとめへの導入として、キリスト論を考えている。伝道に出ていく中で、実践と学問の両者に、取り組める姿勢を作りたい。</p>																																	
<p><b>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</b></p> <table border="1"> <tr><td>1</td><td>序論 キリスト論の課題</td></tr> <tr><td>2</td><td>新約聖書におけるキリスト論 共観福音書</td></tr> <tr><td>3</td><td>新約聖書における様々なキリスト論</td></tr> <tr><td>4</td><td>古典的キリスト論</td></tr> <tr><td>5</td><td>アウグスティヌス、オリゲネス</td></tr> <tr><td>6</td><td>アンセルムス、トマス・アクィナス</td></tr> <tr><td>7</td><td>M.ルター、J.カルヴァン *課題（小論文）の提出</td></tr> <tr><td>8</td><td>J.ウェスレーの神学</td></tr> <tr><td>9</td><td>啓蒙主義・歴史主義神学</td></tr> <tr><td>10</td><td>19世紀自由主義神学・弁証法神学</td></tr> <tr><td>11</td><td>実存主義神学・哲学的神学</td></tr> <tr><td>12</td><td>日本の神学 *ブック・レビューの提出</td></tr> <tr><td>13</td><td>現代の神学とキリスト論</td></tr> <tr><td>14</td><td>現代の福音主義神学</td></tr> <tr><td>15</td><td>まとめ 古代および宗教改革、そして近代・現代のキリスト論 *レポート提出</td></tr> </table>				1	序論 キリスト論の課題	2	新約聖書におけるキリスト論 共観福音書	3	新約聖書における様々なキリスト論	4	古典的キリスト論	5	アウグスティヌス、オリゲネス	6	アンセルムス、トマス・アクィナス	7	M.ルター、J.カルヴァン *課題（小論文）の提出	8	J.ウェスレーの神学	9	啓蒙主義・歴史主義神学	10	19世紀自由主義神学・弁証法神学	11	実存主義神学・哲学的神学	12	日本の神学 *ブック・レビューの提出	13	現代の神学とキリスト論	14	現代の福音主義神学	15	まとめ 古代および宗教改革、そして近代・現代のキリスト論 *レポート提出
1	序論 キリスト論の課題																																
2	新約聖書におけるキリスト論 共観福音書																																
3	新約聖書における様々なキリスト論																																
4	古典的キリスト論																																
5	アウグスティヌス、オリゲネス																																
6	アンセルムス、トマス・アクィナス																																
7	M.ルター、J.カルヴァン *課題（小論文）の提出																																
8	J.ウェスレーの神学																																
9	啓蒙主義・歴史主義神学																																
10	19世紀自由主義神学・弁証法神学																																
11	実存主義神学・哲学的神学																																
12	日本の神学 *ブック・レビューの提出																																
13	現代の神学とキリスト論																																
14	現代の福音主義神学																																
15	まとめ 古代および宗教改革、そして近代・現代のキリスト論 *レポート提出																																
<p><b>[使用テキスト・参考文献]</b></p> <p>水垣渉・小高毅『キリスト論論争史』（2003年）。</p>		<p><b>[単位認定の方法及び基準]</b></p> <p>課題に関する試験代用レポート（60%）、ブック・レビュー（20%）、および質疑・応答などの平常（20%）とする。</p>																															

授業のタイトル (科目名)	単位数	免許・資格 必修/選択	授業担当																														
宗教哲学	2		池田 美芽																														
<p><b>[授業の目的・ねらい]</b>            近代啓蒙における宗教は、理性からはずれたもの、非科学的なものとして位置づけられ、理性を基準とする哲学より劣ったものとの評価を受けてきた。それゆえ、近代の神学は、キリスト教を理性の外に位置づけることで自己の独自性を保とうとしてきた。しかし哲学は本来、神という絶対的存在をいかに人間の限られた力と経験で理解し、深めるかという問題を扱ってきた。近代から現代に至る代表的なキリスト教思想家のキェルケゴール、シモーヌ・ヴェイユ、エディット・シュタインの3名の思想を取り上げ、その中で現代と信仰、哲学と宗教、理性と信仰といった問題を深めていく。</p> <p><b>[授業全体の内容と概要]</b>            3者の思想をテキストに即して深く読み込み、また最近の研究成果に従って解説してゆく。3者はそれぞれに近代思想とキリスト教、教会や宗教に対し注目すべき視点を持つので、それらの持つ意義を深く現代に即して考えていきたい。</p> <p><b>[授業修了時の達成 (到達目標)]</b>            ルター派、敬虔主義、カトリック、神秘主義などさまざまな宗教的伝統が、現代の思想の中でどのように評価され、また生きたものとなるかをともに考え、その内容を自分の問題として考えられるようになること。</p>																																	
<p><b>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</b></p> <table border="1"> <tr><td>1</td><td>序論 神学と宗教哲学</td></tr> <tr><td>2</td><td>キェルケゴールの思想と風土 19世紀デンマーク</td></tr> <tr><td>3</td><td>哲学と宗教 キェルケゴール『哲学的断片』</td></tr> <tr><td>4</td><td>宗教性の諸段階 キェルケゴール『非学問的後書』</td></tr> <tr><td>5</td><td>認容のキリスト教 キェルケゴール『愛の業』</td></tr> <tr><td>6</td><td>殉教のキリスト教 キェルケゴール『キリスト教の修練』</td></tr> <tr><td>7</td><td>不安とおそれ キェルケゴール『不安の概念』</td></tr> <tr><td>8</td><td>実存と現実のはざままで キェルケゴール 『死に至る病』</td></tr> <tr><td>9</td><td>現代に神は見出せるか シモーヌ・ヴェイユ『工場日記』</td></tr> <tr><td>10</td><td>人間の現実の中へ シモーヌ・ヴェイユ『重力と恩寵』</td></tr> <tr><td>11</td><td>人間は何を見出せるか シモーヌ・ヴェイユ『根を持つこと』</td></tr> <tr><td>12</td><td>現代と中世 エディット・シュタイン『現象学からスコラ学へ』</td></tr> <tr><td>13</td><td>女性であること エディット・シュタイン『女性論』</td></tr> <tr><td>14</td><td>現代と神秘主義 エディット・シュタイン『十字架の学問』</td></tr> <tr><td>15</td><td>現代の宗教哲学の課題、試験代用レポート提出</td></tr> </table>				1	序論 神学と宗教哲学	2	キェルケゴールの思想と風土 19世紀デンマーク	3	哲学と宗教 キェルケゴール『哲学的断片』	4	宗教性の諸段階 キェルケゴール『非学問的後書』	5	認容のキリスト教 キェルケゴール『愛の業』	6	殉教のキリスト教 キェルケゴール『キリスト教の修練』	7	不安とおそれ キェルケゴール『不安の概念』	8	実存と現実のはざままで キェルケゴール 『死に至る病』	9	現代に神は見出せるか シモーヌ・ヴェイユ『工場日記』	10	人間の現実の中へ シモーヌ・ヴェイユ『重力と恩寵』	11	人間は何を見出せるか シモーヌ・ヴェイユ『根を持つこと』	12	現代と中世 エディット・シュタイン『現象学からスコラ学へ』	13	女性であること エディット・シュタイン『女性論』	14	現代と神秘主義 エディット・シュタイン『十字架の学問』	15	現代の宗教哲学の課題、試験代用レポート提出
1	序論 神学と宗教哲学																																
2	キェルケゴールの思想と風土 19世紀デンマーク																																
3	哲学と宗教 キェルケゴール『哲学的断片』																																
4	宗教性の諸段階 キェルケゴール『非学問的後書』																																
5	認容のキリスト教 キェルケゴール『愛の業』																																
6	殉教のキリスト教 キェルケゴール『キリスト教の修練』																																
7	不安とおそれ キェルケゴール『不安の概念』																																
8	実存と現実のはざままで キェルケゴール 『死に至る病』																																
9	現代に神は見出せるか シモーヌ・ヴェイユ『工場日記』																																
10	人間の現実の中へ シモーヌ・ヴェイユ『重力と恩寵』																																
11	人間は何を見出せるか シモーヌ・ヴェイユ『根を持つこと』																																
12	現代と中世 エディット・シュタイン『現象学からスコラ学へ』																																
13	女性であること エディット・シュタイン『女性論』																																
14	現代と神秘主義 エディット・シュタイン『十字架の学問』																																
15	現代の宗教哲学の課題、試験代用レポート提出																																
<p><b>[使用テキスト・参考文献]</b>            テキストは使用しない。参考書は授業で示す。</p>		<p><b>[単位認定の方法及び基準]</b>            学期末試験代用レポート80%、平常点20%の総合評価</p>																															

授業のタイトル (科目名)	単位数	免許・資格 必修/選択	授業担当
キリスト教倫理学	2		池田 美芽
<p><b>[授業の目的・ねらい]</b> 現代に生きるキリスト者として、複雑で多様な現代社会にいかにかに生きるか、またキリスト教がこの現代の問いかけにいかにかに答えるか、聖書の視点とボンヘッファーら現代神学者の成果を学び、かつ現代の問題にキリスト者としてどのように理解するかを考えて行きます。</p> <p><b>[授業全体の内容と概要]</b> 授業の前半はディートリッヒ・ボンヘッファー『現代キリスト教倫理』を講読し討論・解説を行う。後半は現代倫理の問題を取り上げ、各自の研究発表・討論を行う。</p> <p><b>[授業修了時の達成 (到達目標)]</b> ボンヘッファー『現代キリスト教倫理』の問題意識、論点を把握し、現代のキリスト教会にどのような影響を与えているかを理解する。また、自分自身の問題として、ボンヘッファーから学んだことを自らの信仰生活に生かせる研究を行い、発表することでその成果を共有する。</p>			
<b>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</b>			
1	序論 ボンヘッファーの生涯と思想		
2	『現代キリスト教倫理』より「形成としての倫理学」		
3	『現代キリスト教倫理』より「同じ形になること」		
4	『現代キリスト教倫理』より「遺産と没落」		
5	『現代キリスト教倫理』より「罪責・義認・更新」		
6	『現代キリスト教倫理』より「二領域・四委任」		
7	『現代キリスト教倫理』より「究極のものと究極以前のもの」		
8	『現代キリスト教倫理』より「自然的なもの」		
9	『現代キリスト教倫理』より「神の愛と世界の墮落」		
10	『現代キリスト教倫理』より「歴史と善」		
11	現代の倫理的問題― (1) 戦争と平和		
12	現代の倫理的問題― (2) 家族と教会		
13	現代の倫理的問題― (3) 労働と社会		
14	現代の倫理的問題― (4) ジェンダーと生命		
15	現代の倫理的問題― (5) 教会と国家、試験代用レポート提出		
<b>[使用テキスト・参考文献]</b> ディートリッヒ・ボンヘッファー『現代キリスト教倫理』(新教出版社)		<b>[単位認定の方法及び基準]</b> 試験代用レポート(70%)及び平常点(授業への積極的参加・発表など、30%)の総合評価	

授業のタイトル (科目名) 比較哲学	単位数 2	免許・資格 必修/選択	授業担当 池田 美芽
<p><b>[授業の目的・ねらい]</b> 近代哲学史の中で、キリスト教と近代的理性の葛藤、とりわけ近代哲学における神の問題を中心に、人間観、ニヒリズム、世俗化、ポストモダンといった現代の思想的課題における、キリスト教と哲学の根本問題を考えていきます。</p> <p><b>[授業全体の内容と概要]</b> 近代哲学の代表的思想家の思想と、そのキリスト教との関連における問題を取り上げ解説していきます。講義形式で行いますが、積極的な授業参加を心がけて下さい。</p> <p><b>[授業修了時の達成 (到達目標)]</b> 近代西洋哲学史の主要なテーマである理性と信仰、近代性の本質と神の問題の基本を理解し、現代の思想的状況への展望をもったレポートが書けるようになること。</p>			
<b>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</b>			
1	序論 西洋近代における神と自我の問題		
2	デカルトにおける近代的自我の形成		
3	パスカル「パンセ」における神の問題		
4	ロック「キリスト教の合理性」における神		
5	ルソーの市民宗教論		
6	カント「宗教論」における「根元悪」		
7	ヘーゲル「キリスト教の精神とその運命」		
8	フォイエルバッハ「キリスト教の本質」		
9	ニーチェと神—現代ニヒリズムの原点		
10	ベルクソン「道徳と宗教の二源泉」		
11	ハイデガー「存在と時間」		
12	ハンナ・アーレント「人間の条件」		
13	ミシェル・フーコー「監獄の誕生」		
14	レヴィナスの問い—神なき時代における隣人		
15	ポストモダンと宗教・試験代用レポート提出		
<b>[使用テキスト・参考文献]</b> 資料は授業で随時配布する。		<b>[単位認定の方法及び基準]</b> 試験代用レポート (80%) と平常点 (30%) 授業態度、積極的参加等の総合評価による。	

授業のタイトル (科目名)	単位数	免許・資格 必修/選択	授業担当																														
教会史 I	2		塚本 恵																														
<p><b>[授業の目的・ねらい]</b>            キリスト教の成立から、四～五世紀に至る教会の歴史を思想史的に取扱い、多様な展開を見せた初期教会史の論争過程についての基礎知識の習得を目指す。特にキリスト教作家たちに対する伝記的関心を持って、その文書資料に直接当たることで、その歴史過程を探りたい。</p> <p><b>[授業全体の内容と概要]</b>            使徒教父と護教家たち・正統と異端・迫害と背教・三位一体論論争・キリスト論論争など、カルケドン公会議へと至る歴史過程を理解し、これらについての現代の宣教への適用についても考えてみたい。テキストに沿って、参考文献を指示しつつ講義をする。特に現代の宣教への適用について、質問をするので (あるいは提出して)、それについて討論する。</p> <p><b>[授業修了時の達成 (到達目標)]</b>            正統と異端の問題をはじめ、様々な論争が行われた古代キリスト教の歴史を理解することで、その現代の宣教に対する意義を考えてみるようにする。</p>																																	
<p><b>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</b></p> <table border="1"> <tr><td>1</td><td>序論 教会史の課題と方法</td></tr> <tr><td>2</td><td>キリスト教の背景</td></tr> <tr><td>3</td><td>キリスト教の成立/新約聖書の年代</td></tr> <tr><td>4</td><td>使徒教父たち/新約聖書外典・偽典</td></tr> <tr><td>5</td><td>ローマ帝国とキリスト教/ギリシア弁証家たち</td></tr> <tr><td>6</td><td>初期の異端者たちとカトリック教会の成立</td></tr> <tr><td>7</td><td>異端論駁の開始と北アフリカのキリスト教 *課題 (小論文) の提出</td></tr> <tr><td>8</td><td>モナルキア主義/アレクサンドリア学派</td></tr> <tr><td>9</td><td>アリウス論争とニカイア公会議</td></tr> <tr><td>10</td><td>三位一体論論争/アタナシウス</td></tr> <tr><td>11</td><td>キリスト論論争/コンスタンティノーブル公会議</td></tr> <tr><td>12</td><td>エフェソ公会議/カルケドン公会議 *ブック・レビューの提出</td></tr> <tr><td>13</td><td>アウグスティヌス</td></tr> <tr><td>14</td><td>西方教会と東方教会</td></tr> <tr><td>15</td><td>まとめ ローマ帝国/キリスト論・三位一体論論争/古代から中世へ *レポート提出</td></tr> </table>				1	序論 教会史の課題と方法	2	キリスト教の背景	3	キリスト教の成立/新約聖書の年代	4	使徒教父たち/新約聖書外典・偽典	5	ローマ帝国とキリスト教/ギリシア弁証家たち	6	初期の異端者たちとカトリック教会の成立	7	異端論駁の開始と北アフリカのキリスト教 *課題 (小論文) の提出	8	モナルキア主義/アレクサンドリア学派	9	アリウス論争とニカイア公会議	10	三位一体論論争/アタナシウス	11	キリスト論論争/コンスタンティノーブル公会議	12	エフェソ公会議/カルケドン公会議 *ブック・レビューの提出	13	アウグスティヌス	14	西方教会と東方教会	15	まとめ ローマ帝国/キリスト論・三位一体論論争/古代から中世へ *レポート提出
1	序論 教会史の課題と方法																																
2	キリスト教の背景																																
3	キリスト教の成立/新約聖書の年代																																
4	使徒教父たち/新約聖書外典・偽典																																
5	ローマ帝国とキリスト教/ギリシア弁証家たち																																
6	初期の異端者たちとカトリック教会の成立																																
7	異端論駁の開始と北アフリカのキリスト教 *課題 (小論文) の提出																																
8	モナルキア主義/アレクサンドリア学派																																
9	アリウス論争とニカイア公会議																																
10	三位一体論論争/アタナシウス																																
11	キリスト論論争/コンスタンティノーブル公会議																																
12	エフェソ公会議/カルケドン公会議 *ブック・レビューの提出																																
13	アウグスティヌス																																
14	西方教会と東方教会																																
15	まとめ ローマ帝国/キリスト論・三位一体論論争/古代から中世へ *レポート提出																																
<p><b>[使用テキスト・参考文献]</b>            E.J.グッドスピード/R.M.グラント校訂『古代キリスト教文学入門』(1994年)、N.ブロックス『古代教会史』(1999年)、菊池栄三・菊池伸二『キリスト教史』(2005年)。</p>		<p><b>[単位認定の方法及び基準]</b>            期末試験を60%、宿題 (ブック・レビュー) を20%、クラスでの質疑・応答など平常を20%とする。</p>																															

授業のタイトル (科目名)	単位数	免許・資格 必修/選択	授業担当																														
教会史Ⅱ	2		塚本 恵																														
<p><b>[授業の目的・ねらい]</b></p> <p>中世教会史は、思想史的には、四～五世紀のアウグスティヌスの神学によって始まると言えよう。そこで、このクラスでは、このアウグスティヌスから始めて、十六世紀の宗教改革に至るまでの歴史を思想史的に取り扱い、一般世俗史を含めて、さらに多様な展開を見せた中世教会史の基礎知識の習得を目指す。西方教会のみならず、東方教会の展開にも目を向けてみたいと思う。</p> <p><b>[授業全体の内容と概要]</b></p> <p>テキストに沿って、参考文献を指示しつつ講義をする予定。特に現代の宣教への適用について、質問をするので(あるいは提出して)、それについても討論したい。</p> <p><b>[授業修了時の達成(到達目標)]</b></p> <p>古代教会史(一～五世紀)に引き続いて、神の民の歴史の概略を理解し、そこに働いておられる神の御旨に思いをはせる。そして様々な歴史の展開から、現代の宣教に対する意味を考えるようにする。</p> <p><b>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</b></p> <table border="1"> <tr><td>1</td><td>序論 中世教会史の課題と方法</td></tr> <tr><td>2</td><td>ローマ・カトリック教会の成立、アウグスティヌスの神学</td></tr> <tr><td>3</td><td>修道院、ベネディクトゥス戒律、普遍論争</td></tr> <tr><td>4</td><td>カロリング・ルネサンス、公会議の歴史</td></tr> <tr><td>5</td><td>十世紀・十一世紀の神学、中世の宇宙観、十字軍</td></tr> <tr><td>6</td><td>十二世紀ルネサンス、カンタベリーのアンセルムス、アベラルドゥス</td></tr> <tr><td>7</td><td>ロシア正教会、アッシジの聖フランチェスコ *課題(小論文)の提出</td></tr> <tr><td>8</td><td>アルベルトゥス・マグヌス、トマス・アキナス、ルネサンス</td></tr> <tr><td>9</td><td>宗教改革の先駆、ドゥンス・スコトゥス、J.ウィクリフ、W.オッカム</td></tr> <tr><td>10</td><td>宗教改革 M.ルターの神学</td></tr> <tr><td>11</td><td>P.メランヒトン、J.カルヴァン</td></tr> <tr><td>12</td><td>宗教改革ラディカル派 *ブック・レビューの提出</td></tr> <tr><td>13</td><td>対抗宗教改革、キリシタンの時代</td></tr> <tr><td>14</td><td>英国国教会とJ.ウェスレー、メソジスト運動</td></tr> <tr><td>15</td><td>まとめ 中世キリスト教の諸相、宗教改革とプロテスタント *レポート提出</td></tr> </table> <p><b>[使用テキスト・参考文献]</b></p> <p>W.ウォーカー『キリスト教史2 中世の教会』、同『キリスト教史3 宗教改革』、菊池栄三・菊池伸二『キリスト教史』(2005年)。</p> <p><b>[単位認定の方法及び基準]</b></p> <p>課題に関する試験代用レポートを60%、ブック・レビューを20%、クラスで質疑・応答など平常を20%とする。</p>				1	序論 中世教会史の課題と方法	2	ローマ・カトリック教会の成立、アウグスティヌスの神学	3	修道院、ベネディクトゥス戒律、普遍論争	4	カロリング・ルネサンス、公会議の歴史	5	十世紀・十一世紀の神学、中世の宇宙観、十字軍	6	十二世紀ルネサンス、カンタベリーのアンセルムス、アベラルドゥス	7	ロシア正教会、アッシジの聖フランチェスコ *課題(小論文)の提出	8	アルベルトゥス・マグヌス、トマス・アキナス、ルネサンス	9	宗教改革の先駆、ドゥンス・スコトゥス、J.ウィクリフ、W.オッカム	10	宗教改革 M.ルターの神学	11	P.メランヒトン、J.カルヴァン	12	宗教改革ラディカル派 *ブック・レビューの提出	13	対抗宗教改革、キリシタンの時代	14	英国国教会とJ.ウェスレー、メソジスト運動	15	まとめ 中世キリスト教の諸相、宗教改革とプロテスタント *レポート提出
1	序論 中世教会史の課題と方法																																
2	ローマ・カトリック教会の成立、アウグスティヌスの神学																																
3	修道院、ベネディクトゥス戒律、普遍論争																																
4	カロリング・ルネサンス、公会議の歴史																																
5	十世紀・十一世紀の神学、中世の宇宙観、十字軍																																
6	十二世紀ルネサンス、カンタベリーのアンセルムス、アベラルドゥス																																
7	ロシア正教会、アッシジの聖フランチェスコ *課題(小論文)の提出																																
8	アルベルトゥス・マグヌス、トマス・アキナス、ルネサンス																																
9	宗教改革の先駆、ドゥンス・スコトゥス、J.ウィクリフ、W.オッカム																																
10	宗教改革 M.ルターの神学																																
11	P.メランヒトン、J.カルヴァン																																
12	宗教改革ラディカル派 *ブック・レビューの提出																																
13	対抗宗教改革、キリシタンの時代																																
14	英国国教会とJ.ウェスレー、メソジスト運動																																
15	まとめ 中世キリスト教の諸相、宗教改革とプロテスタント *レポート提出																																

授業のタイトル (科目名)	単位数	免許・資格 必修/選択	授業担当																														
教理史 I	2		塚本 恵																														
<p><b>[授業の目的・ねらい]</b></p> <p>教理史とは、キリスト教が成立して以来、様々な論争の中から、使徒的・教會的に信じられ選択された教えが、歴史的にどのように展開してきたかを学ぶものであろう。とすれば、教会における信仰告白なしには教理史はありえないのである。そこで、このクラスでは、キリスト教の信仰告白なしは教えが、その当初からどのように進展してきたのかを、様々な側面から信仰的に見つめてみたいと思う。そして現代の宣教へと思いを馳せたいのである。</p> <p><b>[授業全体の内容と概要]</b></p> <p>キリスト教の成立から、古代教会、そして中世の教会へと、様々な教理が展開した様子について講義をし、それらに関する基礎知識の習得を目指すと共に、現代の諸問題との関連を探ってみたい。内容として、正統と異端、信条、三位一体論、キリスト論などに言及したいと思う。</p> <p><b>[授業修了時の達成 (到達目標)]</b></p> <p>古代・中世教会において論じられ、信仰定式へと進展した諸問題を理解し、その現代への宣教に対する影響や意義を考え、実践的な知識とすることが目標である。</p>																																	
<p><b>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</b></p> <table border="1"> <tr><td>1</td><td>序論 教理史の課題と方法論</td></tr> <tr><td>2</td><td>旧約聖書の信仰 ユダヤ教信仰の成立</td></tr> <tr><td>3</td><td>中間時代史の諸問題</td></tr> <tr><td>4</td><td>共観福音書と主イエス 初代教会における信仰告白 使徒パウロ</td></tr> <tr><td>5</td><td>使徒および使徒後時代</td></tr> <tr><td>6</td><td>使徒教父たちの神学</td></tr> <tr><td>7</td><td>ギリシャ・ローマ思想とキリスト教 ギリシャ弁証家 *課題 (小論文) の提出</td></tr> <tr><td>8</td><td>古代教会における正統と異端</td></tr> <tr><td>9</td><td>カトリック教会の成立 使徒伝承</td></tr> <tr><td>10</td><td>異端論駁 テルトゥリアヌス</td></tr> <tr><td>11</td><td>アレクサンドリア学派</td></tr> <tr><td>12</td><td>修道院の成立 三位一体論論争 *ブック・レビュー提出</td></tr> <tr><td>13</td><td>キリスト論論争 コンスタンティノーブル公会議</td></tr> <tr><td>14</td><td>アウグスティヌス ドナティスト論争 ベラギウス論争</td></tr> <tr><td>15</td><td>まとめ 旧・新約聖書の信仰/正統と異端/様々な論争 *レポート提出</td></tr> </table>				1	序論 教理史の課題と方法論	2	旧約聖書の信仰 ユダヤ教信仰の成立	3	中間時代史の諸問題	4	共観福音書と主イエス 初代教会における信仰告白 使徒パウロ	5	使徒および使徒後時代	6	使徒教父たちの神学	7	ギリシャ・ローマ思想とキリスト教 ギリシャ弁証家 *課題 (小論文) の提出	8	古代教会における正統と異端	9	カトリック教会の成立 使徒伝承	10	異端論駁 テルトゥリアヌス	11	アレクサンドリア学派	12	修道院の成立 三位一体論論争 *ブック・レビュー提出	13	キリスト論論争 コンスタンティノーブル公会議	14	アウグスティヌス ドナティスト論争 ベラギウス論争	15	まとめ 旧・新約聖書の信仰/正統と異端/様々な論争 *レポート提出
1	序論 教理史の課題と方法論																																
2	旧約聖書の信仰 ユダヤ教信仰の成立																																
3	中間時代史の諸問題																																
4	共観福音書と主イエス 初代教会における信仰告白 使徒パウロ																																
5	使徒および使徒後時代																																
6	使徒教父たちの神学																																
7	ギリシャ・ローマ思想とキリスト教 ギリシャ弁証家 *課題 (小論文) の提出																																
8	古代教会における正統と異端																																
9	カトリック教会の成立 使徒伝承																																
10	異端論駁 テルトゥリアヌス																																
11	アレクサンドリア学派																																
12	修道院の成立 三位一体論論争 *ブック・レビュー提出																																
13	キリスト論論争 コンスタンティノーブル公会議																																
14	アウグスティヌス ドナティスト論争 ベラギウス論争																																
15	まとめ 旧・新約聖書の信仰/正統と異端/様々な論争 *レポート提出																																
<p><b>[使用テキスト・参考文献]</b></p> <p>J.ペリカン『キリスト教の伝統 -教理発展の歴史-』第1巻(2006年)。</p>		<p><b>[単位認定の方法及び基準]</b></p> <p>試験代用レポートを60%、ブック・レビューを20%、クラスでの質疑・応答など平常を20%とする。</p>																															

授業のタイトル (科目名)	単位数	免許・資格 必修/選択	授業担当
教理史Ⅱ	2		塚本 恵
<b>[授業の目的・ねらい]</b> 古代教会において様々な形で論じられ成立した、キリスト教の諸教理は、中世そして近代の教会において、さらに錯綜した教理論争の展開を見せている。このクラスでは、キリスト教信仰の諸教理について、基本的な理解を深めつつ、現代の宣教を見つめる目を育てたい。			
<b>[授業全体の内容と概要]</b> 古代教会から中世教会へと展開したキリスト教会は、その後西方（ラテン）教会および東方（ギリシア・ロシア）正教会としてそれぞれ独自の道を歩み、さらに宗教改革によってローマ・カトリック教会からプロテスタント諸教会が独立した。そこには様々な信仰告白があり、様々な教理の理解が存在している。そうした相違を含めた基礎知識の習得を目指したい。			
<b>[授業修了時の達成（到達目標）]</b> 様々な教派による教理を理解することとは、自分が属する教派・教団におけるアイデンティティの確立である。そこから、自分たちの信仰告白をしつつ、その上に立って、宣教へと出かけるのである。その意味で、幅広い知識・理解を持つことが目標である。			
<b>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</b>			
1	序論 中世および近代における教理史の課題		
2	アウグスティヌスの遺産 神の国 ドナティスト論争		
3	恩恵論 ペラギウス論争 予定論		
4	中世の聖餐論 普遍論争とキリスト教教理		
5	キリスト単意論 贖罪論と中世		
6	マリア論 救済論 聖画像論争		
7	知解を求める信仰 自然神学 *課題（小論文）の提出		
8	トマス・アキナスと中世哲学		
9	異端と直面して 教皇権/叙任権		
10	宗教改革とプロテスタント アウグスブルク信仰告白		
11	改革する教会とラディカル宗教改革 ジュネーブ教会信仰問答		
12	対抗宗教改革と世界宣教 キリシタン時代の宣教 *ブック・レビュー提出		
13	啓蒙主義と敬虔主義 フリー・メソジストの信仰		
14	キリスト教世界とキリスト教文化 ローマ・カトリックの信仰		
15	まとめ 中世における様々な論争 プロテスタントの信仰告白 *レポート提出		
<b>[使用テキスト・参考文献]</b> J.ベリカン『キリスト教の伝統 ー教理発展の歴史ー』第2～5巻(2006～8年)。		<b>[単位認定の方法及び基準]</b> 試験代用レポートを60%、ブック・レビューを20%、クラスでの質疑・応答など平常を20%とする。	

授業のタイトル (科目名)	単位数	免許・資格 必修/選択	授業担当
説教学(理論)	2		重富 勝己
<p><b>[授業の目的・ねらい]</b></p> <p>説教学は単に「説教をいかに作り、語るか」という方法論の問題にとどまらない。キリストの救済の出来事を告知するすぐれて実践神学的課題(伝道・牧会と教会形成)でありつつ、神学のみならず周辺の諸学問分野をも統合しながら進めて行くことが求められる。前期は主に理論面を中心に扱うが良い理論は良い実践を生み出す。共に学び合うことを通して霊性の涵養と神学形成の場にしたがいたい。</p>			
<p><b>[授業全体の内容と概要]</b></p> <p>前期は説教そのものの概観-説教とは何か、説教のコンテキスト-いつ、どこで、誰に語られるのか、を通して説教の神学について学ぶ。また、説教の対象であるテキスト(聖書および聴衆)の解釈とは何か、そしてそれらの相互作用について指定テキストを分担して発表し合いながら学ぶ。</p>			
<p><b>[授業修了時の達成(到達目標)]</b></p> <p>説教はどれひとつとして同じものはない。語る個人、語られる対象というコンテキストに依存する。それに加えて変ることのない神の言葉である聖書をどう関わらせるか、そのためにどのような準備と学び、訓練が必要かを共有したい。</p>			
<p><b>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</b></p>			
1	オリエンテーション - 説教学の基本文献紹介と課題提出		
2	説教学序論 - 説教の定義、説教の歴史(旧約・新約聖書)		
3	同上 - 説教の歴史(初代教会から宗教改革)		
4	説教とコンテキスト - (1) 歴史的、牧会的コンテキスト		
5	説教とコンテキスト - (2) 典礼的、神学的コンテキスト		
6	説教の神学について		
7	実際の説教から学ぶ - (1) ルター、カルヴァンの説教集から		
8	同上 - (2) ジョン・ウェスレーの説教集から		
9	語るべきものを手に入れるために - 学びの生活		
10	聞き手を解釈する行為とは - コンテキストとしての聴衆		
11	テキストを解釈する行為とは - 聖書テキストを選択し、確定することとは		
12	同上 - テキストそれ自身のコンテキストおよびテキストと自分の接点		
13	テキストと聞き手の間を解釈する行為とは - 聖書解釈者としての説教者		
14	説教を形にするために - 説教に求められる特質としての統一性		
15	説教の年間計画づくり - 現代における説教の課題		
<p><b>[使用テキスト・参考文献]</b></p> <p>F.B.クラドック『説教-いかに備え、どう語るか』(吉村和雄訳、教文館)</p>		<p><b>[単位認定の方法及び基準]</b></p> <p>講義出席および指定したミニ・レポート提出等の日常点を5割。説教分析および課題レポート提出を総合評価する。</p>	

授業のタイトル (科目名)	単位数	免許・資格 必修/選択	授業担当
説教学(実践)	2		重富 勝己
<p><b>[授業の目的・ねらい]</b></p> <p>説教学は単に「説教をいかに作り、語るか」という方法論の問題にとどまらない。キリストの救済の出来事を告知するすぐれて実践神学的課題（伝道・牧会と教会形成）でありつつ、神学のみならず周辺の諸学問分野をも統合しながら進めて行くことが求められる。後期は実際に説教をつくり演述し、共に耳を傾け評価する技術を養いたい、説教の前後の配慮についても学びたい。</p>			
<p><b>[授業全体の内容と概要]</b></p> <p>後期は説教を形にして行く際のさまざまな要素について学びつつ、実際の説教を作って演じていただく。また、単に聴くだけでなく、聴く側も評価するという能動的な姿勢が必要である。評価は単に批判ではない。自らの説教を豊かにするための創造的な学びでもある。そのために歴史上の説教を批判分析する作業も前期に引き続いて行う。さらに説教の主役として働く聖霊と祈りの働きについて締めくくることがになる。</p>			
<p><b>[授業修了時の達成 (到達目標)]</b></p> <p>説教はどれひとつとして同じものはない。語る個人、語られる対象というコンテキストに依存する。それに加えて変ることのない神の言葉である聖書をどう関わらせるか、実際に説教を形づくり、演述し、評価することを通して説教を豊かにする課題をさまざまに分かち合いたい。</p>			
<p><b>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</b></p>			
1	オリエンテーション	－ 課題提出 (説教集の紹介、説教者の祝祭説教の課題指定)	
2	説教を形にするととは	－ 説教に求められること (形の持つ機能、説教の形とは)	
3	同上	－ メッセージを形にする (文章にする、演述する) 行為とは	
4	歴史上の説教者から学ぶ	－ K. バルト、E. プルンナーの説教集から説教分析へ	
5	日本の説教者から学ぶ	－ 植村正久、加藤常昭の説教集から説教分析	
6	説教を豊かにする	－ 説教の言語とは (比喩と例話)	
7	説教を語る行為とは	－ 説教壇に立つときに覚えるべきこと、主役としての聖霊と祈り	
8	説教の実践と評価	－ (1) 創世記12章1～9節をテキストに	
9	説教の実践と評価	－ (2) 創世記22章1～14節をテキストに	
10	説教の実践と評価	－ (3) 詩編23編1～6節をテキストに	
11	説教の実践と評価	－ (4) マタイ福音書5章38～47節をテキストに	
12	説教の実践と評価	－ (5) マタイ福音書6章25～34節をテキストに	
13	説教の実践と評価	－ (6) ローマ書3章21～31節あるいは1コリント10章1～13節	
14	説教の実践と評価	－ (7) 黙示録21章1～8節をテキストに	
15	まとめ	－ ポスト説教について	
<p><b>[使用テキスト・参考文献]</b></p> <p>F.B.クラドック『説教-いかに備え、どう語るか』(吉村和雄訳、教文館)</p>		<p><b>[単位認定の方法及び基準]</b></p> <p>講義出席および指定した箇所からの説教演述および説教原稿の提出。さらに指定した説教の説教分析レポート提出、これらを総合評価する。</p>	

授業のタイトル (科目名) フィールド・ワーク	単位数 2	免許・資格 必修/選択	授業担当 津村春英
<p><b>[授業の目的・ねらい]</b> この科目は、教会奉仕者として必要な品性、見識、実践能力などを涵養することを目的としている。また、専攻科（神学専攻）に在籍中は全員、必ず履修しなければならない。</p> <p><b>[授業全体の内容と概要]</b> 献身者としての資質と実践能力を向上させるために、1)下記のクラスでの学び、2)奉仕教会での実習、3)主日礼拝、祈祷会の説教要約の提出の3部で構成される。また、伝道実習、神学科リトリート、神学教育チャペルでは当然ながら指導的な役割を果たすことが期待される。</p> <p><b>[授業修了時の達成（到達目標）]</b> 適切な説教ができ、伝道に情熱を燃やし、やがて人々から尊敬される人材の育成を目指している。</p>			
<b>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</b>			
1	献身者として1	16	献身者として6
2	献身者として2	17	献身者として7
3	献身者として3	18	献身者として8
4	献身者として4	19	献身者として9
5	献身者として5	20	献身者として10
6	礼拝について1	21	牧会者として1
7	礼拝について2	22	牧会者として2
8	礼拝について3	23	牧会者として3
9	礼拝について4	24	牧会者として4
10	礼拝について5	25	牧会者として5
11	伝道者として1	26	宣教について1
12	伝道者として2	27	宣教について2
13	伝道者として3	28	宣教について3
14	伝道者として4	29	宣教について4
15	伝道者として5	30	宣教について5
<b>[使用テキスト・参考文献]</b> 適宜、資料を配付		<b>[単位認定の方法及び基準]</b> 上記の出席、奉仕状況と実習教会での報告に基づく	

授業のタイトル (科目名) 英語神学書講読	単位数 2	免許・資格 必修/選択	授業担当 重富 勝己
--------------------------	----------	-------------	---------------

**[授業の目的・ねらい]**

英語による資料・文献を読む力の養成をする。英語はどの分野においても文献研究の不可欠の能力であるが、ここで実際に下記の文献を通して神学特有の基礎的英語（術語・表現）に慣れ親しみ、個々の専門分野への礎石としたい。神学書講読は単語句の丸暗記ではない内容把握と理解が求められる。そのためには神学全般の基礎知識が前提とされるのは言うまでもない。

**[授業全体の内容と概要]**

今回は英国の聖書解釈学の権威John Barton “How the Bible came to Be” (London,1997)を採り上げる。聖書入門論といっても良い読みやすいものだが、聖書の形成史と歴史的意義について著者の鋭く優れた指摘に心をとめて読み進みたい。

既読箇所単語句のミニ・テストを随時、行う。履修者は分担して担当箇所を発表することが求められ、担当箇所は清書してシェアする。

**[授業修了時の達成（到達目標）]**

聖書学、神学の基本用語（術語）の英語による内容把握能力の向上。

**[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]**

1	Introduction	16	What is Scripture - Citations
2	The Contents of the Old Testament	17	Authorship
3	The Contents of the New Testament	18	Date
4	Writing the Books - Biblical World	19	Relevance to Present Concerns
5	Who wrote the Scriptures ?	20	Universality
6	The Gospels, The Letters,	21	Mutual Consistency
7	Dating the Old Testament	22	Excess of Meaning
8	Collecting the Books - “Moses”	23	Holy Books as Sacred Objects
9	“The Law & The Prophets”	24	From Books to Scriptures
10	The Book of the Twelve	25	Fixing the Canon
11	The Gospels	26	The Old Testament (1)
12	The Pauline Letters	27	The Old Testament (2)
13	The Rest of the New Testament	28	The New Testament (1)
14	Who Collected the Scriptures ?	29	The New Testament (2) & Conclusion
15	How Many Senses Does Scriptures have ?	30	What is Contemporary Interpretation ?

**[使用テキスト・参考文献]**

John Barton “How the Bible came to Be” (London,1997)

**[単位認定の方法及び基準]**

日常点(演習参加)随時、単語句の小テストを行う(5割)。また学期末には購読した担当部分を翻訳文でシェアし、内容を議論する(5割)。これらを総合評価する。